

『大阪大学大学院文学研究科
外部評価報告書2008』に応じて

大阪大学大学院文学研究科
評価・広報室

2009年11月

目次

はじめに	-----	i
------	-------	---

専門分野別外部評価への応答

1	哲学哲学史	-----	1
2	現代思想文化学	-----	2
3	臨床哲学	-----	3
4	中国哲学	-----	4
5	インド学・仏教学	-----	5
6	日本学	-----	6
7	日本史学	-----	7
8	東洋史学	-----	8
9	西洋史学	-----	9
10	考古学	-----	10
11	人文地理学	-----	11
12	日本文学	-----	12
13	比較文学	-----	13
14	中国文学	-----	14
15	国語学	-----	15
16	英米文学	-----	16
17	ドイツ文学	-----	17
18	フランス文学	-----	18
19	英語学	-----	19
20	日本語学	-----	20
21	美学・文芸学	-----	21
22	音楽学	-----	22
23	演劇学	-----	23
24	美術史学	-----	24

はじめに

大阪大学大学院文学研究科は、2008年度に外部評価を実施しました。これは、専門分野ごとに、それぞれの専門分野における教育・研究・社会貢献活動について評価を行ったものです。本研究科は、2009年3月にその結果を『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2008』として刊行し、ホームページ上でも公開しています。

今年度、多くの専門分野が、外部評価の結果をふまえて専門分野別年度目標を作成し、すでに外部評価結果を有効に利用していますが、本報告書は、外部評価に対する各専門分野の回答を、全専門分野についてまとめたものです。これによって、文学研究科が、外部評価をふまえ、今後どのような活動をしていこうと考えているのかがおわかり頂けるものと思います。

なお、専門分野によって、記述量に大きな違いがありますが、それは、外部評価書で指摘された問題点の違いを反映するものであり、記述量の多寡が改善への熱意の大きさに比例しているわけではありません。

本報告書をご利用になられる際には、『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』の関連部分を合わせてご一読いただくよう、お願いいたします。

2009年11月

大阪大学大学院文学研究科評価・広報室

「『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて」

(1)教育

「基礎ゼミ」「哲学基礎A」「哲学基礎B」「思考の世界」の内容を学生によりアピールするものに変更してゆきたい。

高校への出張講義の機会も増やしてゆきたい。

ラジオメタフィシカのコンテンツを含め、HPの充実を図る。

地域性(大阪)ということに関しては、文学研究科全体として取り組んでおり、一哲学哲学史専門分野だけの課題とは考えていない。

古代中世分野の教育については、ひきつづき専門家を非常勤講師に招いて対応してゆきたい。

日本ないし東洋の哲学については、現在は個別の授業として開講してはいないが、これまで学生のニーズに応じて研究指導を行ってきた。分野の性格上、別個のテーマとして掲げるよりも、隣接分野との協力体制を維持して教育研究に当たることが、学生にとっても望ましいと考える。

ひきつづき学生の海外留学を促す。

(2)研究

ひきつづき欧文雑誌による研究業績の発信に努め、内外の研究者を招いた研究会や講演会の開催を実現してゆきたい。

伝統的哲学の研究については、共同研究という形で、学外の専門家を呼び寄せて、総合的な研究テーマのうちで、研究課題としてきたが、これからもこうした形態で研究課題としてゆきたい。

(3)社会貢献

昨年からはじめた、社会人向けの国際哲学の日(11月19日)記念企画を継続して実施する。

「『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に依って」

(1)教育

学生の論理的思考の涵養については、引き続き「思考の世界」や「論理学」の開講によってそれに努めてまいります。

英語運用能力涵養のための授業を引き続き開講し、それに基づいて学生に国際的な視野を身につけさせ、国内外での欧文による研究発表につなげてゆきたい。

日本学術振興会研究員にも積極的に応募するよう指導してゆく。

HPの充実を図る。

引き続き学生の海外留学を促す。

(2)研究

引き続き欧文雑誌による研究業績の発信に努め、内外の研究者を招いた研究会や講演会の開催を実現してゆきたい。

(3)社会貢献

昨年からはじめた、社会人向けの国際哲学の日(11月19日)記念企画を継続して実施する。

ラジオ・メタフシカのより一層の充実を図る。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

1) 当専門分野の取り組みが「新しい教育スタイルの試みとして全国的にも注目されている」と評価されている。すなわち、現場を掘り起こすための哲学的対話法・コミュニケーション法の開発をめざしている点のパイオニア性、具体的にはグループワークでの共同討議、環境問題をテーマとする市民を交えた討論などが評価されている。この点は、関連団体とも連携して、さらに活発かつ多様に進めたい。2) 反面で、課程博士学生の論文発表数、口頭発表数が、近年一定の伸びを見せつつも、「十分な成果とは言いがたい」と評価されている。その大きな原因は、臨床哲学が学生に「二足のわらじ」をはくことを要求している点にある。すなわち、伝統的な哲学・倫理学研究の研鑽を積む(これは論文・口頭発表により計れる)だけではなく、各自が臨床哲学固有のフィールド(医療・看護、教育、環境その他)をもつことを要求しているのである。フィールドでの活動や外部との交渉は、テキストや教室での討論に基づく伝統的な研究に割ける時間を圧迫する一方、活動・交渉の成果は論文・口頭発表に容易に現れない。今後は、①臨床哲学的フィールド活動や企画をどのように研究業績として外部に公表するか、その方法を研究室として工夫していき、その心構えを学生に周知していくとともに、②伝統的な哲学・倫理学研究と臨床哲学的研究・活動との連続・連携をより密接かつスムーズにするべく、教員・学生が一体となって努めたい。3) また、「英語力強化を目標として、英語による授業を開講するなど、特別な取り組みを行っている点は特筆すべきところ」と評価されており、これも継続していきたいが、現状は学内非常勤講師1名(およびそれをサポートする臨床哲学教員1名)の負担で行われており、阪大共通教育その他で学生のリスニングなど基礎学力が底上げされること、ないし文学部で積極的な英語発信力養成サポートが行われることなどがなくては、十分な成果を生み出せない。

(2) 研究

外部資金の導入、学会誌の刊行等についていずれも高い評価を受けている。1) 21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」(代表者: 鷲田清一)の終了後、グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」(代表者: 小泉潤二)に教員の一部が参加しているので、臨床哲学としてこちらでの発信力もさらに高めていきたい。2) 科研費研究についても、「本専攻分野の理念とその実践が時代と社会のニーズに応え、独創的な意義をもち、テーマ的にも無限の発展性を秘めていることの証」と高い評価を受けているが、この1、2年科研費申請システムの問題もからんで科研費研究の代表者となっていない教員もいる。研究コンセプトは十分に用意されているので、それを申請・採択につなげる方向で改善したい。3) 『臨床哲学のメチエ』を休刊しているが、これは学生にその企画・制作を委ねて教育の一環とする方針を再考するためである。教員あるいは研究室全体の研究内容の発信については、『臨床哲学』をより充実させていく方向で実現する。4) 国際連携については、外部評価書に言及されている以外に、「子どもの哲学」や哲学プラクティス、「ヒューマニティーズ・セラピー」を中心とした国際学会への参加・発信を行うなど、引き続き積極的に推進していく。とくに子どもの哲学とヒューマニティーズ・セラピーについては、韓国の関係機関・団体と連携を強めていきたい。5) 個別教員の研究業績についても高く評価されているが、これは伝統的な哲学・倫理学研究の業績に対してのみ向けられたものである。しかるに、臨床哲学教員は各自、この枠には盛り込めないフィールド的活動をしているので、(1)教育の1)で述べたことと関連して、「臨床哲学的フィールド活動や企画をどのように研究業績として外部に公表するか、その方法を研究室として工夫」していく。

(3) 社会貢献

1) 臨床哲学は鷲田(前)教授(現総長)以来、社会学連携を「臨床哲学の理念そのものから発する」重要な活動とみなして実践している。この点は外部評価書でも十分受けとめていただいている。2) ただし、「その活動成果が自らの研究活動へとフィードバックするという点で、全国的に見ても、社会学連携活動のモデルとなりうるものである」という高い評価を若干面映ゆく受けとめざるをえないのは、社会学連携活動を「本業」の教育・研究の一環としても評価する風潮がまだ学内・研究科内で十分とはいえないからである。単に「外」(社会)に対するサービスではなく、他にもないその活動が臨床哲学の研究実践であり教育実践(本業)となっている—このことについての理解を学内・研究科内で広げていくことが重要な課題であると考えている。3) 外部評価書で取り上げられている市民向けの哲学カフェ、サイエンスカフェ、さらに高校と連携した哲学の授業については、今まで以上に積極的に推進していく。その一環としてこれらの活動を支えるべく、オン・ザ・ジョブ・トレーニング的な教育、インターンシップ的連携も行う。また、これらについては、鷲田総長の理念や意向を生かし、21世紀懐徳堂やコミュニケーションデザイン・センターと密接に協力しつつ行う。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

まず、研究室の特色として、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に研究していること、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象とすること、(3)「懐徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行っていること、が指摘されている。そして、教育面においては、それらの研究資源により、目標に沿って着実な教育がなされていると評価されている。また、名古屋大学大学院の中国学関係研究室との定期的な研究交流についても、学生の学力向上に資するものとして評価されている。

ただ、「もし課題があるとすれば」という穏やかな表現で、「留学経験者および留学生の受け入れが少ない」点が指摘されている。評価者は「それは当研究室の少人数の教員のエフォートを超えるものであるかもしれない」と好意的に見ているが、確かに、この点についての実績は少ない。少人数の学生・教員によって構成される研究室の場合、留学生を送り出すこと、あるいは外国人留学生を受け入れることは、甚大な影響があり、軽率には実践できない。

ただ、国際化という点については、研究室が主催する国際学会を2004年に大阪大学で、また、2008年に台湾で開催した実績があり、決して軽視している訳ではない。むしろ、学生諸君の国際的活動を十分に支援してきていると自負している。今後、留学および留学生の受け入れについても、可能な限り考えていきたい。

(2) 研究

総合的な評価として、「当研究室の設定した研究目標に従い、研究が円滑かつきわめて生産的に実施されていることが高く評価される」とある。

その評価は、①研究の実施、②優れた研究業績、の2点からなり、まず①研究の実施については、(ア)外部資金の導入、(イ)学会誌の刊行、データベースの提供など、(ウ)国際連携、の3点から評価されている。特に(ア)については、教員全員が研究代表者として外部資金を獲得していることが評価され、また(イ)についても、学術誌『中国研究集刊』を毎年2冊刊行しているほか、別冊も出版し、さらに、「WEB懐徳堂」を通じて懐徳堂研究の成果をデジタルコンテンツとして公開していること、なども高く評価されている。

また、②優れた研究業績については、(1)竹簡・帛書など新出土資料の研究、(2)中国思想および日本漢学の研究、(3)懐徳堂文庫の調査研究、に分けて記述とされているが、それぞれ、「教員・大学院生いずれも質量ともにきわめて優れた研究業績を挙げている」と評価されている。特に、(1)については、当研究室が事務局となっている「戦国楚簡研究会」を定期的開催していることに触れ、「当研究室はこの分野において日本を代表する研究拠点であり、国際的にも知名度が高い」ときわめて高い評価が与えられている。

こうした評価に応えよう、今後も、(1)～(3)を研究の柱として、それぞれの進展に力を注ぎたい。

(3) 社会貢献

当研究室の伝統として、懐徳堂事業への積極的な関わりがある。評価者もこの点に注目し、「(財)懐徳堂記念会事業や大阪大学の資料展示に協力していること」を指摘している。また、これらの事業への参加が、「教員のほか大学院生も協力し、研究室の組織的な社会貢献になっている」と評価している。

一研究室としては、十分な社会貢献の実績を有すると評価されているわけであるが、一方で、「懐徳堂文庫の調査研究等に関していえば、懐徳堂は大阪大学の源流の一つと周知されているのであれば、その人員面および予算面における支援体制を確立し、これを全学的にバックアップしていく必要がある」との重要な指摘もある。これは、当研究室の反省と言うよりは、全学に対する強い要望として研究室からも提言しておきたい。

「『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて」

(1) 教育

学部学生が少ないという指摘に関しては、既に2008年度から対策を実施している。大阪大学文学部は、一年次の第2セメスターにおいて、各自の希望によって専修を決定する仕組みを構築しているが、その決定に際して、文学部の各専修から最低一名の教員が順に文学部の一年次生に対して授業を実施する文学部共通概説が大きな影響を与えていると考えられる。この文学部共通概説の担当教員は、従来、本専修では1名の教員が担当していたが、2008年度からそれを2名に増やし、本専修の内容を一年次学生により広く知ってもらう機会を作った。その対策が効を奏し、2009年度に本専修に加わった新二年次生は2名となり、3年ぶりに複数の新二年次生を迎え入れることとなった。その他にも、例示のあった、「学生が身近に感じる題材等を積極的に取り入れ、講義の中で活かす努力」も試みる所存である。

(2) 研究

これに関しては、否定的評価はまったく受けなかったもので、今後とも従来の方針を展開させる。

(3) 社会貢献

従来講演や概説書などによる社会貢献に関して、「研究者としてはかなり噛み砕いた内容と考えていても、一般参加者には難解な内容に映ることがあるので、さらなる努力が必要であろう」と指摘された点については、真摯に受けとめ、一層の努力をする所存である。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1) 教育

評価者からは、教員や大学院生の研究活動、また学部学生や大学院生への教育活動について、「たいへん充実しており、アウトプットは質量ともに豊かである」との評価をいただいた。

(2) 研究

「ジェンダー論や植民地状況での葛藤やさまざまな意味でのマイノリティをめぐる力の作用に目を据えた研究において、全国的にも世界的にも有数の研究教育拠点となっている」と評価されていることは、ありがたいことである。特に「日本ではジェンダー研究に力を入れる研究教育機関がさほど多くないので、大阪大学文学部の日本学のこの方面での発展は高く評価されてよい」と日本学研究室の方針は高く評価されている。また、「学際的なアプローチによる専門分化の閉塞を超えていこうとする試みは今後その意義を増していく」のに対して、「日本学の教員諸氏はそのような役割をよく自覚しており、多様な学問分野の研究者との研究交流に力を入れているのは頼もしいことである」と学際的・横断的な研究姿勢に対して、高く評価している。こうした高い評価をふまえて、今後とも教育・研究の両面で日本学研究室の発展を目指したい。

(3) 社会貢献

国際化が大きく進展している今日、「日本学という立場から、近代日本の文化や言説の政治性に注目した研究を重視するという特徴をもつ」日本学講座に対して、「ますます人材養成の需要が高まっていくと考えられ」、「広い視野から学際的に、また国際比較の視野を重視しつつ取り上げて研究していくことが望まれる」と評価者は指摘している。そして、日本学研究室では、こうしたことを「いち早く進めて来たのであり、21世紀の日本の、また国際社会の求めるものに積極的に応じてきたと言える」と評価している。評価者は、日本学研究室が、「国内的にも、国際的にもアクチュアルな諸問題に直接かかわるような問題」、「日本、韓国、中国など東アジアの諸国の間でなかなか相互理解が困難な近代史の諸課題、たとえば戦争の記憶と戦死者の追悼のあり方について、内外の移住者の処遇について、「民族」概念をめぐる葛藤について、女性の地位や人口調整問題について、障害者をめぐる知識や制度の問題」などと具体的に研究成果を列挙し、「積極的に研究課題に設定して」、「多くの貴重な業績をあげており」、「長期的に東アジアの、また広く国際社会での相互理解を深めていく上での貢献は小さくない」と東アジアはもとより、国際社会での貢献を評価している。「留学生や外国人研究者の受け入れ、国内の関連諸分野の媒介者としての機能、また学術国際交流の推進といった点でも一定の貢献がみられる」と評価したうえで、「留学生や外国人研究者の受け入れや国際発信という点では、新たな取り組みを期待したい」と評価・勧告している。留学生をあげてみると、台湾から6名、韓国から5名、中国から2名、トルコ・ドイツ・フランス・ブラジルから各1名、計17名である。本研究室は、学際的横断的な教育・研究の発展を標榜しているところからすると、まだ留学生の数は少ないかもしれない。今後とも大学院修了後、自国で活躍している研究者などと連携して、留学生を増やしていく所存である。本研究室では、「国際日本学研究会」を設立して、第1回学術大会を韓国(光州市、全南大学校)で、第2回学術大会を日本(大阪大学)で開催し、第3回学術大会を今年韓国(ソウル市・高麗大学校)で開催予定である。海外の研究者と国際交流や国際的発信をより一層推進していくつもりである。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

- ・歴史学方法論講義、歴史教育論演習といった取り組みが、学生にどのような教育効果を挙げているか検証することは、短期的には難しい。ただ、2008年度に私立高校の教員や博物館学芸員として就職した大学院生たちは、歴史教育論演習での経験が役だったと述べており、一定の教育的効果が得られていることは間違いない。いずれにしても中長期的に検証を続けていくべき問題である。
- ・大学院生中で他大学出身者の比率を高める配慮が必要である旨指摘された。これは、2006年・2007年の二年間に評価対象が限定されていることから生じた評価であり、長い目で見ればあてはまらないものと考えている。現に2009年度に博士前期課程に入学した者6名の内3名は、他大学の出身者である。

(2) 研究

- ・助教の科研費獲得への援助や外国人研究者の受け入れという指摘はその通りであり、早速2009年度から改善に向けて努力したい。
- ・院生が相互に切磋する仕組みの工夫や個別の指導の強化を通じて、全体の底上げを図る必要を指摘された。この点に関しては、評価者に送付したデータが大学内でのものに限ったため、大学を超えて組織されている学会や研究会での大学院生たちの多彩な取り組みが十分に評価されなかったことに起因する。提供するデータについては、実態をより反映した幅広いものとする努力が必要だろう。

(3) 社会貢献

- ・自治体史などの社会貢献活動と本務との連関が不明瞭であるとの指摘をうけた。確かに自治体から依頼をうけた場合は、社会貢献活動として引き受けざるをえないのが実情であるが、本務がおろそかになつては本末転倒であり、その辺を考慮して選択していく必要があるだろう。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

本専門分野が行ってきた教育活動について、評価者からは、ほぼ適切な教育成果が得られているとの評価を得た。とくに研究者の育成に関わって、専門的な知識やスキルを系統的・段階的に学ばせてゆく教育システムのもと、これまで実力のある人材を学界に送り出してきたことが特記されている。ただここ数年に限って見ればそうした人材が少し枯渇してきていることも併せて指摘されている。近年の日本における学生全体の質の「低下」を考えると、学界を牽引し得る人材養成の場として常に機能し続けることは相当な困難を伴うが、時代状況に応じた教育環境の整備を心がけ、今後も研究者養成機関としての役割を果たせるように努力してゆきたい。

また近年は研究者とともに高度職業人の育成にも重きをおいている。この点については評価者からは特段の指摘はなかったが、今後さらにそうした人材を育てるための機関として積極的に機能することが期待されている。既に研究者・高度職業人双方の育成のための共通基盤として、深い専門性と広い視野の両方を備えられるようにカリキュラムを構築しているが、今後もその教育効果を検証しつつ、より充実した教育体制の構築を目指してゆく。

(2) 研究

評価者からは、明確な個性をもった発信力の強い研究を行っているとの評価を得た。また研究分野についても、東洋史の全分野をカバーするのではなく、自覚的に戦略的な分野の配置をしている点が、他大学でも見習うべき卓越した見識と評価された。

他方で、各教員の研究活動が活発であるにもかかわらず、その活動が森安を除いて代表作といえるような単著の専門的研究書に結実していないことが問題点として指摘されている。この背景として評価者は、日本全体(或いは東アジア全体)の研究環境がプロジェクト重視型に傾き、大学教員が様々な学術イベントや社会に向けた発信などに引きずり回され多忙をきわめている状況を挙げている。

この指摘は妥当なものであり、すみやかに問題点の改善に向けて努力したい。まずは青木・荒川(2008年度)がそれぞれこれまでの研究をまとめるかたちで博士論文を執筆し、学位(文学)を取得している。桃木も、文学研究科が設けているサバティカル制度を利用して博論を完成させており、2009年度には学位を取得する予定である。さらに次の段階として、それぞれに提出した博士論文を専門的研究書として出版すべく、現在準備している所である。

今後も、競争的資金を獲得するとともに社会に向けた発信を維持するなか、いかに自らの研究時間を確保するかが大きな課題として残されている。必ずしも両者は相反するものではないとは言え、各教員の研究の質を維持できるように、制度面などの改善を通じてそのサポート体制を構築してゆきたい。

(3) 社会貢献

教育や研究と密接に関わるものとなるが、桃木を中心にした世界史教育への積極的な取り組みについて高い評価を得た。とくにこの活動が、大学の研究者だけでなく広範な高校教員を巻きこんで新たな世界史教育のあり方を追求しているという点で、社会的に極めて有意義な活動であり、かつ学問的にも大きな可能性をもっていると指摘する。

この点は単に評価者の個人的な見解というにとどまらず、評価として広く共有されつつある。具体的に挙げれば、阪大の歴史教育や概説の出版(森安の『シルクロードと唐帝国』桃木の『海域アジア史研究入門』『歴史学のフロンティア』)が社会的に注目されるとともに、先端研究と教育・社会を結びつけている例としてこれらの取り組みが、『史学雑誌』(回顧と展望の総説・歴史理論の項)や『歴史学研究』『日本歴史』などの日本を代表する学術雑誌において連続的に取り上げられている。今後もこうした高い評価に応えるべく、それぞれの活動を進展させてゆきたい。

(4) そのほか

本専門分野の年齢構成について、現在の時点では学界を牽引する指導的年齢層がそろっているものの、若手が少ないこと、またジェンダーバランスの点で、女性教員がゼロである点が問題点として指摘されている。評価者も指摘するように、女性教員が必ずいなくてはいけないということはないが、自己評価書類のなかにそうした問題への自覚的関心がほとんど無いように見えるのは確かに問題である。スタッフ補充にあたっては、研究教育の国際化をはじめ様々な要求があり、個々の補充の事情に応じて何を優先させるべきか一様ではあり得ないが、今後、年齢構成やジェンダーバランスの点についてしかるべき機会を得て改善をはかってゆきたい。

「『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて」

(1) 教育

年度目標でも掲げている、論理力・分析力の涵養、高度の外国語力の養成、さらにはプレゼンテーション・スキル向上のための教育プログラムが正しく評価された。また、大学院生に出版実務の習得や雑誌編集業務を経験させる実習についても肯定的な理解を得られた。加えて、着実に課程博士号を授与していることも高く評価していただいた。課題として指摘された「教育効果の判定」については、今後、卒業論文等の質を継続的に検証するなどして達成度を見極めるように努力していきたい。

(2) 研究

所属教員による着実な研究成果の公表、科研費をはじめとする多様な外部資金の獲得が評価された。また、責任母体として学術専門誌『西洋史学』を刊行し、専門研究誌『パブリック・ヒストリー』を編集、出版していることが、学界に寄与するものであると認めていただいた。加えて、本専門分野の特色が、世界史として西洋史を考えるアプローチにあり、その伝統は積極的に継承されて行くべきであるとの指摘があった。この励ましの言葉を真摯に受け止め、今後もかかる研究理念の共有に努めて日本と世界の西洋史学のさらなる発展に尽力したい。

(3) 社会貢献

年度目標にも掲げている、高校世界史教科書執筆や放送大学への出講等の活動が評価された。さらに、「全国高等学校歴史教育研究会」を通じた中等教育との連携活動が高く評価していただいた。また、社会貢献活動全般について、文学研究科全体としての拡充が求められたが、この点については研究科の方針と歩調を合わせながら、今後鋭意努力していきたい。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に依って

(1)教育

外部評価報告書では、可能であれば、朝鮮書や中国書講読の開講が望まれる旨の指摘を受けた。現有スタッフの専門領域の点から朝鮮書、中国書講読を授業として開講することは難しいが、招聘研究員などの制度を利用して多様な人材を受け入れる中で、授業以外の形でも自主的な講読会を開けるような環境をつくっていききたい。また、旧大阪外国語大学と統合したメリットを生かして、他学部で研究上必要な英語以外の言語を学べる仕組みを学生に周知していききたい。

上記のほかに課程博士の取得率の低さについても指摘があった。大学院重点化以降の博士後期課程在籍者のうち、最終的には7割程度が学位を取得しているが、単位修得退学後に取得するケースが多いため、データの的には後期課程の「修了生」が少なくなるという事情がある。ほとんどが専門職のポストを得て単位修得退学しているので、それ自体はキャリア形成の点で悪いことではないが、標準修学年限の間に学位が取れるような指導を心がける必要は確かであろう。毎年着実な業績をあげ、結果としてそれが専門職への就職と学位取得の双方に結びつくような指導を目指したい。

(2)研究

研究についてはおおむね良好な評価を受けているので、引き続き、個人の研究の充実に加えて、研究報告書の刊行や論文集の刊行などを目指していきたい。また、留学生の交換や国際連携には今後の課題を残しているとの指摘もあったが、博士後期課程の院生などが留学するほか、今年度は学内共同研究で国際共同研究の推進も考えており、今後一層の国際連携を図るように努めたい。

(3)社会貢献

ウェブサイトによる情報発信は更新が少々停滞気味との指摘を受けた。ただ、夏頃に夏季の発掘調査が入っていることから、連日の情報更新など集中的に更新が行われている。評価時には冬にかかろうとする時期で、そのような更新があまり進んでいなかったのは事実であることから、今年度以降は、HPの更新において大学院生などによる積極的な参加を仰いで、定期的な情報発信に努めたい。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

「① 教育目標にしたがって、教育が円滑に行われているか」という点では、「着実な教育が行われている」との評価がなされ、カリキュラムや非常勤講師の選任が適切に行われていることや、学生・院生が自主的に研究テーマを選択していることが評価されている。継続して関係する事項に関しては努力していきたい。「②適切な学業成果が得られているか」という点では、比較的優秀な業績を残してきている点が評価された。しかし、GISを専門とする教員の不在が指摘されている、ただし、その代替措置を講じていることにも言及があった。限られた人的資源の中ではあるが、ひきつづき、不足する部分の補完を常に考慮しながら教育面での活動を補強していきたい。

(2) 研究

「① 研究目標にしたがい、研究が円滑に行われているか」という点では、まず、外部資金の導入については、2004年度からの4年間で教員2名が科研費6件、その他の外部資金5件、合計で11件もの外部資金の獲得をしていることを高く評価された。当該専門分野における研究のインフラストラクチャの提供の点では、小規模教室のため学会誌の刊行はできていない半面で、研究プロジェクトに関するニューズレターやデータベースの提供を行っている点を評価され、コンピュータ・リテラシーやプレゼンテーション技術を重視していることとあわせて、「円滑な研究を後押ししている」と言及された。さらに国際連携の点では、小林教授によるネパールにおける疾病の研究や、東アジアを中心とした領域における外邦図の研究、堤准教授によるスウェーデンの研究者らとの国際共同研究が評価された。

「② 優れた研究業績が生み出されているか」という点では、院生の数は少ないものの課程博士の学位授与が行われるなど「順調に博士後期課程の院生が育っている」と評価され、「査読付き論文3本」を学位の原則条件としている点を適切であると見られた。あわせて小林教授の書籍が「第4回 人文地理学会賞」を受けた点を挙げて、当該専門分野が一定水準の研究業績を生み出しているものと考えられた。しかし、外部資金獲得後の研究成果の発表や院生の国際会議などでの発表機会が少ない点が挙げられている。後者に関しては、評価後に小林教授を編者とする『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』が公刊された。また、堤准教授も論文博士の学位を授与され、その成果の一部を公刊に向けて準備中である。院生の国際会議での発表については、努力して実現していくよう期したい。

(3) 社会貢献

社会貢献の点では、学会や公共団体での役職を中心に二名の教員が積極的に役割を担っている点が評価されている。さらに小林教授の放送大学における人文地理学の授業やテキストの刊行、堤准教授により公開されている人口減少関係データベース群に高い評価を頂いた。くわえて、故・小林健太郎教授逝去後の人文地理学教室の再建という課題に対して、現在の二教員の努力によって「教室が再建を遂げ順調な道を歩み始めた」という印象で結ばれており、評価される側としては、面はゆい面もあるが、ひきつづき努力していきたいと思う。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

教育指導および学業成果の二点から評価をいただいた。教育指導においては、大学院生の多様な研究テーマに応えるべく、各時代分野にわたる教員スタッフの配置とカリキュラム構成上での長を指摘された上で、研究会・発表会での口頭発表から論文の完成へと導く教育態勢の充実ぶりを高く評価していただいた。その結果としての学業成果、すなわち大学院生の学内および学外学会での口頭発表および論文発表状況、また課程博士論文の提出状況を概観して、高水準の専門教育が施されている現状を指摘していただいた。これらは概ね我々の自己評価と背離するところはないものと思われる。

外国人研究者や留学生の受け入れにも積極的であることを評価していただいているが、なお留学生に対する「日本文学の基礎知識をしっかりと習得させる」ような指導の必要性を喚起していただいた。確かに現状では、対象を留学生に特化したカリキュラムは準備されていない。個別に院生と留学生との間で読書会や勉強会を開催していることは承知しているが、日本文学専門分野としてシステム化されたものでないことはもちろんである。評価者も述べておられるように「その解決は容易ではない」が、どうしても対象を狭く深く追究することに偏りがちであることは事実であり、逆に広く薄く基礎知識を習得させる方途について、学部生・大学院生を含めて考える必要がある。また博士論文の審査について、学外の審査委員1名を加えることが望ましい旨の指摘をいただいた。このことについては学位審査の透明性を高めるために、文学研究科内でも検討が進められているところである。すべての提出論文について学外委員を登用することは、提出本数が多い場合、日程調整等が困難になる恐れや経費面での問題があるものの、何らかの基準に沿って学外委員を加える審査方法についても検討を進めていくことが今後求められよう。

(2) 研究

研究に関しては「外部資金の導入」「学会誌の刊行、学会・研究会の開催・運営など」「国際連携」「研究業績」の各項目から評価をいただいた。2004年度から2007年度の4年間についての、主として教員スタッフの研究活動に関する評価であるが、それぞれの項目について好意的な評価が得られたことは、評価書を参照すれば了解していただけることであり、大学院生ともども今後とも一層の研究活動に邁進していきたい。

(3) 社会貢献

何をもちて社会貢献とするかについては、評価書の内部でも揺れのあるところであるし、専門分野によっても大いに異なるところがある。一般的に言えば、研究活動によるものとして、学会運営に携わり、また大会や研究会の開催を受け入れるということもあろうし、教育活動によるものとして、研究職に就くための研究者養成あるいは高度の専門的知識を要する専門職に就く人材を育成することも含まれよう。日本文学専門分野に関しては、今回の評価では国際連携に関する方面での活動を高く評価していただいているし、他にも各種講座の講師、シンポジウムのパネラーや講演会講師、また高大連携の一環としての高等学校への出張講義などを、機会があるごとに可能な限り対応している。また日本文学専門分野の教員が関わって進められている寺社等の史料調査も、研究のみにとどまらない、地域の文化基盤の解明やその文化活動の活性化という社会的意義を担っていよう。今後とも大学外部の社会も視野に入れ、大学内部での活動や成果をいかに発信し活用してもらえようかということを考えていきたい。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1) 教育

評価いただいたように、2009年度も引き続き決め細やかな教育を行ってゆきたいと考えています。ご提案いただいた留学生の追跡調査については、可能なかぎり行い、報告してゆくつもりです。

(2) 研究

筆者が2009年度に着任したため、高く評価いただいた内容について応答できないのが残念ですが、引き続きその水準を維持できるよう努力してゆきたく思っています。

領域を横断する際にも、緻密なテキスト読解がなおざりにされてはならないというご意見には、まったくの同感です。大学院生が専攻する時代と言語と分野があまりに多種多様なため、ご提案いただいた科研費の獲得や学術振興会研究員の採択は今後もかなりの困難が予想されますが、できるかぎり共通する主題をみつけ、研究会やシンポジウムを企画することで道を切り開きたいと思っています。

そのためにも『阪大比較文学』の水準をさらに引き上げ、引き続き活発な学会発表と研究活動を展開してゆくことに努めるつもりです。

(3) 社会貢献

ご指摘のように留学生の受け入れ人数の多さに比して、国際学術交流は活発に行われているとはいえない状況です。使用言語という問題があるためなのですが、今後は留学生の追跡調査と連動する形で、ご指摘の海外からの研究者招聘も視野に入れながら、何らかの社会への発信と還元を模索してゆきたいと思っています。

「『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に依って」

(1)教育

日本の各大学で進行する「中国学離れ」の動きは、本専修・専門分野でも例外ではなく、これに対する対策は急務である。その対策との関連を図りながら、グレード別の段階的なカリキュラム編成を含めて、抜本的な改革を検討したい。

(2)研究

在籍する学生数の減少という状況のもと、大幅な改善はかなりの困難を伴うが、現状を踏まえつつ努力したい。

(3)社会貢献

一般向けの教科書・教養書の刊行や講演の実施など、少ないスタッフで可能な限りのことを行いたい。

「『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に答えて」

(1)教育

正当に評価していただいたと考えている。評価していただいた、双方向的なディスカッションによる指導を今後も継続させていきたいと考えているし、学生の研究対象の幅広さも維持できるよう、努めていきたいと考えている。

(2)研究

正当に評価していただいたと考えている。。評価していただいた、多様性の中にも一貫性のある研究体制という点についても、今後維持できるよう努めたいと考えている。

(3)社会貢献

正当に評価していただいたと考えている。研究対象の広さという点で、一般的な注目を集め、知的潮流を形成しつつある、という評価をいただいたが、今後も、学問的なレベルを落とさずに、知的潮流を形成し続けることを期したいと考えている。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1) 教育

伝統ある「談話会」制度をとおして徹底的なプロフェッショナル養成プログラムが確立されている点が高く評価されたことは喜ばしい。「談話会」で鍛えられた院生たちが日本英文学会、日本アメリカ文学会などの学会で毎年、多数研究発表を行い、評価されていることが何よりもその点を実証しているであろう。

いっぽう、国際学会における実績については、国内学会の場合に比べ見劣りがすることは否めない。ワーズワス・サマーセミナー、国際テニソン学会など毎年コンスタントに1名程度は積極的に挑戦しているが、まだまだ数は少ないといえる。

3年前より、アメリカ合衆国ペンシルバニア大学と提携して毎年2名の院生を短期留学させているが、たとえばそうした機会を利用してアメリカ内の学会参加・研究発表する可能性を探るなど、積極的なチャンネルの創出を図り、院生たちが自然なかたちでそれぞれの研究成果を海外で発表する支援体制を作りたい。

(2) 研究

スタッフの著書、編著書に関し高い評価を受けた。また全員が科研費を得て持続的な研究に励んでいる点も評価されている。今後、ますます個々のスタッフ、および専門分野全体の研究の水準を高めるとともに、それを教育、社会連携にどうつなげていくかを模索すべきときに来ていると思われる。そのためには現在のリソースをさらに活用して、その質および量ともに充実させていくことが、効果的な専門分野の研究の発展に「つながると思われる。たとえばペンシルバニア大学など海外の大学および研究機関との連携協力体制の活用、あるいは中枢を担う学会を巻き込んだプロジェクトの立ち上げなど、その可能性は大きい。

(3) 社会貢献

スタッフ全員、日本英文学会、日本アメリカ文学会関西支部の役員として活躍しており、とりわけ、英文学会関西支部の立ち上げについて阪大スタッフが多大な貢献をした事実が評価されていることは喜ばしい。また、人文社会科学振興プロジェクトの一環である「環境と文学」で重要な役割を担っている点でも評価されている。今後は、そうしたアカデミックな貢献のみならず、一般人を対象にした講演会、セミナー等へのより積極的な参加など、活動の場をさらに広げていく努力を図らねばならない。ただし、そうした活動は、英米文学専門分野スタッフのみでは有効ではなく、西洋文学語学講座、あるいは文学研究科全体のネットワーク作りが必要不可欠である。そのようなネットワークの構築に貢献することも今後の努力目標となる。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1) 教育

ドイツ文学研究室が過去数年にわたって取り組んできた授業プログラムの再編にたいし、一定の評価が与えられたことを多とする。伝統的な文献学的トレーニングの水準を維持する一方で、変化する文化状況・メディア状況に適切に対応した、新たな教育体制を今後とも模索し、実験的な授業内容および授業形態を実践していきたい。それにより、大学院レベルで、研究職以外のキャリアをも形成するプログラムの開発をめざしていく。

(2) 研究

2009年4月に吉田耕太郎氏を准教授として迎え、林正則教授が専門としていた18世紀研究を継承する体制が整った。思想文化史を中心に据えて、あらたな啓蒙主義理解をめざす吉田准教授のスケールの大きい研究は、大阪大学ドイツ文学研究室の風土に新次元を拓くものである。こうしたスタッフ構成の更新を機に、海外研究機関との交流チャンネルを開いて、恒常的に教育・研究交流をする方途を探り、研究活動のいっそうの活性化を図りたい。ノヴァコヴィッチ教師には、本研究室における研究活動にたいする積極的な貢献を強く促す。

(3) 社会貢献

本研究室は引き続き、阪神地区における主要研究拠点のひとつとして、日本独文学会、阪神ドイツ文学会、オーストリア文学研究会の活動を支える。また、三谷教授は関西チェコ／スロバキア協会会長として、また吉田准教授は日本18世紀学会常務理事として、社会活動や学会活動で重要な役割をはたしている。ただし、林正則教授の退職にともない、過去20年以上にわたって置かれていた日本ゲート協会京阪神支部の事務局が本研究室を離れたため、今後は、間接的なかたちで、同協会主催の「ゲート生誕の夕べ」に関与していくことになる。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1)教育

フランス文学専修・専門分野における教育、論文指導、留学などに関して、十分な評価を受けた。とりわけ教員と大学院生が共同して作成した『フランス文学小事典』(2007年刊)について高い評価を受けたことは喜ばしい。評価者は、全国的にフランス文学専攻の学生が激減しているにもかかわらず本研究室ではその影響が少ないと指摘しているが、ここ数年学生数は大幅に減っている。特に博士後期課程在籍者は留学中、休学中の学生を合わせても5名しかいない。さらに学部生に関しても3年生1名、2年生0名という状況である。文学離れという傾向があるのに加えて、大学に入ってから初めて学ぶ外国語を十分に修得する必要があることなども理由として考えられる。そのためフランス文学を専攻するには1年生段階でかなり高いモチベーションを要することになり、そのような学生が極めて少ないのが現状であろう。共通概説や専門基礎科目などでフランス文学の魅力をアピールするしか、今のところ方法は見つからない。

(2)研究

学生の活発な学会発表および学会誌への掲載率の高さについて十分に評価していただいた。また機関誌『ガリア』における査読制、国際性についても高く評価していただいた。フランス文学研究室が母体となる大阪大学フランス語フランス文学会では年に2回研究会を開催し、機関誌『ガリア』を発行しているが、言語文化研究科のフランス語教員の協力なしには考えられない。フランス文学・フランス語の研究・教育に関わる文学研究科と言語文化研究科の教員の緊密な協力体制が全国的にも稀な例であると、評価者は指摘しているが、昨年からは外国語学部のフランス語科教員も会員として参加することになり、いっそう充実すると思われる。

(3)社会貢献

昨年朝日カルチャーセンター大阪教室において講座「フランス・歴史の中の美」を担当することとなり、市民を対象としてフランスの文化、芸術、文学を紹介している。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1) 教育

大学院博士前期入学者の安定的確保が指摘されている。確かに、過去4年間の修了生をしてみると3名、5名、1名、1名となっており、修了生数(言い換えると入学者数)は安定していない。今後は、学外からの受験者を増やすべく各方面に働きかけをする一方で、内部進学者数も増やすために学問・研究の面白さ、高度専門職業人の将来像等について在學生に詳しく説明していきたい。

(2) 研究

「それぞれの教員が研究目標にしたがい活発に研究を行っている」と指摘されており、特に改善を求められた点はない。

(3) 社会貢献

「教育・研究活動に密接に結びついた適正な社会貢献」をしていると指摘されており、特に改善を求められた点はない。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

教育分野の指摘には、1) 多様な学生に応じたきめの細かいカリキュラムを十全な形で用意してほしい、2) 留学生の卒業・修了生で、母国で研究職についている者が少ない、3) 学部生と大学院生との学問的連携体制の確立(維持)の効果を知りたい、4) 専門分野全体での日常的な議論の場が必要ではないか、という4点があった。1)の学生の多様性への対応については、高度専門職業人の養成を主眼とする新設の文化動態論との棲み分けも一部行っており、日本語教育経験のある学生にターゲットを絞った授業も開講している。留学生については、学部・研究科で留学生専門指導担当教員による日本語指導の授業があるが、日本語学の留学生の場合、日本語能力が非常に高く、そうした指導を必要とする者はほとんどいない。修士論文、博士論文の質を考えると、オフィスアワーなどで個別指導を徹底することにより、十分対応できていると考える。ただし、これらの点が、講座の教員間の理解に留まっており、外部に対して明示されていないという問題はある。学部案内・研究科紹介等の冊子やホームページで講座のカリキュラムや指導態勢をより詳しく述べる必要はあるだろう。2)の留学生の出口管理に関しては、高等教育機関に就職した者だけでなく、民間の学校の日本語教師、中等教育機関の教師、国際交流関係の公的機関の職員等、高度専門職業人と見なされる職業についても含めると、かなりの割合で阪大での留学経験を生かした仕事をしていると言える。また、学位取得後の日本での就職も奨励される時代となり、日本国内で研究者、高度専門職業人として働く卒業生・修了生の数も考慮すべきであると考えられる。そうしたところまで目配りをした場合、留学生の卒業・修了後の進路に大きな問題はないと考える。ただし、研究科全体の統計には卒業・修了年度に専任職員として採用されたケースしかカウントされておらず、帰国してから就職活動をした留学生や、日本国内で非常勤講師等を経験した後で就職した者の数は数えられていない。今後、講座独自で長期的なフォローを行い、その結果をホームページ等で公開するなどの方法を考えたい。3)の学部生と大学院生との学問的連携については、ゼミで大学院生の発表を聞いたり、大学院生に研究の相談をする機会を提供することで、より質の高い卒業論文を完成させることにつながっていると考える。質の高さを外部に数値として示すことは卒業論文の場合、非常に困難であるが、例えば、他大学からの博士前期課程受験者が提出する卒業論文を見ると、日本語学講座の卒業論文は大変優れていると考えられる。4)の専門分野内での議論の活性化に関しては、日本語学講座は文法研究から日本語教育にまつわる教師研究まで非常に幅の広い領域をカバーしており、全員で集まって議論することが必ずしも最善の方法ではない部分もある。テーマによって関心のある学生・教員が集まり、各学生、各教員が複数のグループに属しているという有機的なネットワークを作るほうが効率的かもしれない。2008年度まで渋谷、真田は合同でゼミを行っていた。石井、青木は不定期ではあるが、合同ゼミを行っている。また、青木は日本学の杉原達教授と合同の研究会を年1、2回開いており、近接領域の教員、学生との議論の機会も設けられている。2009年度は定年退職者の不補充の期間にあたり、ゼミの形態も変則的な部分があるが、後任採用後は、新たに多様な形態の合同ゼミを考えたい。

(2) 研究

研究分野での指摘には、1) 専門分野としての一体性が弱い、2) 近接領域である国語学との連携がない、3) 外国人研究者を受け入れた成果が目に見える形で残されていない、4) 全教員が博士の学位を有していることが望ましい、の4点があった。1)の専門分野としての一体性の弱さは、評価者も書いているように、多面性という長所が必然的に持つ欠点とも言えるかもしれない。従って、一体性を強化することには多面性を犠牲にするという危険も伴う。教育の項でも述べたように、全員一体型よりは異なる教員の組み合わせによる複数のプロジェクトを考えたいほうが望ましいかもしれない。ここ2年以内に2つの人事が行われる予定であるので、新しいスタッフも加えた研究プロジェクトの立ち上げを検討していきたい。2)の国語学との連携に関しては、国語学講座のスタッフと科研費等のプロジェクトで連携を行ったり、「土曜ことばの会」を開いたりしており、また、宮地裕名誉教授のご寄付による「宮地基金」で国語学と日本語学両方の若手研究者の研究活動に対して、学会発表のための交通費の補助等、経済的な援助を行っている。3)の外国人研究者に関しては、科研費をはじめとする研究で共同して成果をあげている。しかし、2)と3)に関しては、連携活動の存在や成果が外部に必ずしもわかりやすい形で示されていない。今後、ホームページ等でより透明性の高い情報提供をするよう努力したい。4)の教員の博士号に関しては、2009年度より日本語学講座の専任教員全員が博士号をもっている態勢となった。2009年度および2010年度に、定年退職者の後任人事が行われる予定であるが、博士号を持つ者、あるいはそれと同等の研究業績を持つ者を採用すべく努力したい。

(3) 社会貢献

『日本語ポートフォリオ』に関して、日本語学講座の公式HPに掲載してはどうかとの指摘を受けたが、『日本語ポートフォリオ』は、大阪大学の予算あるいは大阪大学が獲得した外部資金だけでなく、他の機関が獲得した資金も使って作られており、日本語学の公式ホームページに掲載することは必ずしも適切ではない。しかし、日本語学講座の教員の仕事であることに変わりはないので、今後、日本語学講座のホームページからリンクを貼るなどの工夫をしたい。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1)教育

外部評価を受けて

教育に関して、教育スタッフおよび学生の規模が大きいこと、毎年のごとくに均して学位を受けるものが着実に生みだされていること、研究分野が多領域にわたるのみならず、そのことを生かして多彩な場で多くの学会発表を行っていることなどが、高い評価を受けたが、今後もそうした長所を伸ばしていく計画である。

(2)研究

研究に関して、成果発表の媒体すなわち多様な専門に関わる定期刊行物が多いこと、教授陣の執筆活動および社会活動が意義深く、またダイナミズムに富んでいることが、高く評価されたが、他方、病のため研究がままならなかった研究者がいたことも、きちんと指摘された。病も癒えつつあり、徐々に通常の活動に立ち戻ってきているが、スタッフ全員が相互に足りないところを補い合い、いっそう活潑な成果を無理なく成就する計画を立てている。

(3)社会貢献

社会貢献に関しては、自治体の文化事業に参加を要請され、十分に応えたこと、数々の大きな国内および国際学会を主宰したこと、学生たちが日刊新聞に毎週、芸術批評を発表しつづけていることなどが、高く評価されたが、専門分野の学術成果が社会から畏敬の念をもって仰ぎ見られることこそ、本来の「社会貢献」であるという、ユニークな指摘を受けた。従来社会貢献を推し進めつつも、評者独自の指摘にも応えるべく、独創性ゆたかな研究の展開を図りたい。研究室の現員およびOBの協力になる、本研究室に独自の研究結果を、2年以内で報告書に纏めるつもりである。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1) 教育

外部評価委員にも、高く評価された「多様化する研究テーマへの対応」「資料批判的研究の強化」といった点については、今後も引き続き努力していきたいと考える。また、外部評価委員に指摘された学部、大学院の同時開講の問題については、基本的には我々も課題として受け止めている。ただ、一時期、特に発表形式の授業において、学部と大学院とが完全に分断されたことから、学生、院生間の交流に問題が生じたことがあり、「総合ゼミ」(音楽学所属の学生、院生、教員の全員が参加する演習)はその改善のために導入された、という経緯があり、カリキュラムとしての整合性と研究室内での交流という二つの問題をバランスよく解決していく必要があると感じている。

(2) 研究

外部評価委員の指摘で改めて、『阪大音楽学報』の学界における重要性について、再認識した。今後とも充実した研究誌となるよう努力したい。また「リポジトリ化」については、これまで未着手だったが、学内の他の機関誌、紀要等の動向をにらみながら効果的な方法を探る予定である。

もう一点、問題として指摘された研究の「国際連携」について。教員、院生の個人レベルでは、オーストリア、ハンガリー、スイス、ブルガリア、ドイツ、アメリカ、アルゼンチン、ポーランド、チェコなどの重要な研究機関に、滞在し、活発な交流がある、と考える(ただし、上記の地域が欧米圏のみに偏っていることは、別の意味で問題があるかもしれない)。が、それらの個人的な交流が研究機関としてフォーマルなものにならない、という点が評価委員による指摘かと思われる。研究科単位での交流協定締結などについては、教員のサバティカルなどの機会を捉え、今後積極的に進めていきたい。

(3) 社会貢献

外部評価委員によって、他の項目とも関連しながら指摘された「インターンシップ」の推進、などについては、これまでのやり方がある程度定着して来た観があるので、そろそろ次のステップ(例えばインターンシップ受け入れ先として、まったく異なる業種の開拓など)に向かうべき時期が来ていると考えられる。

(4) その他(教員の博士号取得)

外部評価委員の指摘のとおり、教員が博士号を取得することは、これからの研究室運営にとって不可欠であろう。この点については、教員の1名が近々の取得に向けて、現在準備中である。

『『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて』

(1)教育

評価報告書では、本研究室のシラパスが「大衆化した学生に阿るような気配がまったく感じられない」として、それは大阪大学だから可能なこととしつつ、最終的には、これを「現在の危機的状況にある大学の、それはむしろあるべき教育態度」と評価されているが、ここに指摘されている本研究室の、とりわけ学部のカリキュラムについては、体系性という点でいささか改善の余地があると考えている。ここに体系性というのは、講義でいえば、概説と各論の適正な配置、演劇各分野のバランスを考慮した科目配置などであるが、これまではスタッフが少ないこともあって、その点への対応ができなかった。しかし、平成21年度からは兼任というかたちではあるが、現代ドイツ演劇を専門とするスタッフが加わった結果、あるていどはこの点の改善が可能な状況になっている。

(2)研究

評価報告書では、本研究室の研究が教育とともに「他より一頭地を抜いている」と高くされている。これは主として演劇の専修等を持つ大学と比較しての評価かと思われるが、わが国の大学で演劇の専修等を持っている大学はごく少数であり、国立大学法人中、唯一の演劇学の講座である本研究室としては、この評価に安住すべきではないと考えている。研究業績の評価については、たとえば同じ文学研究科内の他講座との比較も必要であり、研究業績については、そうしたことも基準として自己計測してゆくことが必要であろう。

(3)社会貢献

評価報告書では、社会貢献についてあまり言及されていない。しいてあげるならば、教員の学会運営についての貢献がそれであろうが、本研究室の教員は市民を対象にした講演会の講師、国や地方自治体等の委員などで、十分な社会貢献を行っている。また、平成20年度から大阪大学が積極的に推進している社学連携事業にも本研究室の教員が委員として参画している。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書2008』に就いて

(1)教育

本講座の教育が、日本、東洋、西洋のみならず、世界の多様な地域の美術に眼を目を向け、また先史から現代に至る幅広い時代をカバーすることを目指していること、また、教育の実際にあつては、寺社や美術館での実地見学を重視するとともに、原典・論文講読などを通して、研究上の方法論の習得に力を注いでいることなどについて、非常に高い評価をいただいた。今後とも、この基本的な目標をより高い次元で実現すべく努力したい。また、学部にあつては、1)初歩的な講義・演習を開講し、専門基礎学力の充実をはかる、2)専門分野の論文を批判的に読む能力を養う、3)実地見学により、美術作品を観察し、記述する能力を養う、4)卒業論文作成のため、研究経過を発表し、相互に批判する演習を行う、といった諸項目、大学院にあつては、1)最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかる、2)美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養う、3)隣接領域への関心を養い、美術史研究の新たな視点をひらく、4)修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う、などの諸項目を、具体的な達成目標と設定している。これに沿って、教育活動の質のさらなる向上に努める。

(2)研究

本講座の専任教員の研究水準、科学研究費など外部資金の導入状況などについて、極めて高い評価を受けた。また、院生の研究発表の成果や、学内外で開催しているシンポジウムなどの活動についても、高評価を得た。今後とも、教員および院生の研究活動の水準を維持すべく努力していきたい。具体的には、1)教員は、一人平均で1本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする、2)科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する、3)博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、一人平均で1本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする、4)研究を促進するため、学外においては美術史学会の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する、といった達成目標を設定している。これに沿って、研究活動のさらなる向上に努める。

(3)社会貢献

社会貢献に関しては、講演会やシンポジウムの開催、あるいは、美術館・博物館の活動に対する積極的な関与という点で、高い評価を受けた。今後とも、専門領域から得られる知を社会に還元する学術書の刊行や、美術館・博物館の活動に対する積極的な関与を通して、社会貢献の充実を図りたい。また具体的には、1)国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力する、2)国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する、3)国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する、といった達成目標を設定している。これに沿って、積極的な社会貢献をおこないたい。

『大阪大学大学院文学研究科 外部評価報告書 2008』に於いて

2009年11月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室

発行 大阪大学大学院文学研究科

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5

TEL:FAX 06-6850-5107 (評価・広報室)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp>
